

「働く女性を
応援する」
キャンペーン

「美しさ」と「健康」。多くの女性が望む二つのテーマを軸に、11月1日品川インターナショナルホール（東京都港区）で「ウーマンヘルスフォーラム」が開催された。この読者向けイベントに参加できなかった人のために、当日の模様を詳細レポート！

ニッポン女性がいつも、いつまでも
美しく、健康であるために

ウーマンヘルスフォーラム

協賛：アストラゼネカ株式会社

第一三共株式会社
Daiichi Sankin
漢方のツムラ



講師
黒川 清さん
(政策研究大学院大学 教授)

1962年東京大学医学部卒、69年東京大学医学部助手から米国ベンシルバニア大学医学部助手、79年米UCLA医学部内科教授、89年東京大学医学部教授、96年東海大学医学部長、97年東京大学名誉教授、2004年東京大学先端科学技術研究センター教授(客員)などを歴任。2003年日本学術会議会長に就任、06年に退任。08年まで内閣特別顧問。

躍する女性の比率を表す「ジエンダー・エンパワーメント指数(GEM)」となると、世界93カ国中で54番目となってしまいます。このギャップは女性が、社会で活躍する機会を失っていることを示しているにほかなりません。

では、日本で女性の活躍が阻まれている理由はなんにか。

第一に、日本は歴史的に「男性優位」社会であるということ。また第二は、雇用体系の問題。終身雇用に年功序列といった今までよく機能したシステムの中では、男性は退職金のために一生同じ会社で働いてきた。一方で、頑張つても上に行けない女性は、退職して海外でMBAを取得したり、自力で外でMBAを取得したり、自力で海外の企業や外資系を渡り歩く。つまり有能な才能が外に流出してしまっていたわけです。そして、女性のように独立するガツツもなく、「どこにも行けない」男性が日本企業に残っていく……。そ

「女性をいかに活用するか、それが日本社会発展の課題」

黒川

うした男たち中心の組織社会が、女性の参入を許さないのも当然のことなのです。

しかし、時代は変わりつつあります。今や誰もが海外旅行に出かけ、インターネットで世界中の情報が瞬時に見られます。外の世界を知り、海外からも評価されることによって、日本社会も変わることを余儀なくされるでしょう。

本題に入る前に、私たちの常識がどこに根ざすのかを考えてみる必要がある、と黒川さん。18世紀末の産業革命以来、産業・経済・社会のパラダイムは時代とともに様変わりし、平均寿命も大きく伸びた。今の私たちの生活は、20世紀によく完成したもの。これから日本社会が変わる余地はまだあるという。

基調講演

女性が健康で活躍する社会を作るために

今の日本社会で、働く女性がどれだけ活躍しているかご存知ですか？

UNDP（国連開発計画）の「ジェンダー開発指数（GDI）」で見ると、日本女性の社会進出は世界で13位。これは選挙権や教育機会、大学進学率などを指標にした数字です。ところが、企業や政治のトップなど社会で活

躍する女性の比率を表す「ジエンダー・エンパワーメント指数(GEM)」となると、世界93カ国中で54番目となってしまいます。このギャップは女性が、社会で活躍する機会を失っていることを示しているにほなりません。

では、日本で女性の活躍が阻まれている理由はなんにか。

第一に、日本は歴史的に「男性優位」社会であるということ。また第二は、雇用体系の問題。終身雇用に年功序列といった今までよく機能したシステムの中では、男性は退職金のために一生同じ会社で働いてきた。一方で、頑張つても上に行けない女性は、退職して海外でMBAを取得したり、自力で海外の企業や外資系を渡り歩く。つまり有能な才能が外に流出してしまっていたわけです。そして、女性のように独立するガツツもなく、「どこにも行けない」男性が日本企業に残っていく……。そ

現在、日本の大学進学率は47.2%（平成19年度）。短大を合わせると、男子50%、女子52.2%で、すでに男女の逆転現象が起こっているのです。こうした高学歴の女性がもっと活躍できる社会を作っていくことが、これがからの日本の活力となるはずであります。みんなの将来に期待しています。



会場には「日経ヘルス」「日経ヘルスブルミエ」「日経ウーマン」などの読者が参加。有意義な一日を過ごした。